

# プロティノスにおける「死体」と「糞尿」

—感覚界における階層—

本 多 慶 輝

[キーワード：①プロティノス ②素材 ③質料 ④魂]

## 序論

新プラトン主義の創始者とされるプロティノスはすべてを超えた第一のもの、つまり「一者」を始原と考え、「一者」から第二のものである「ヌース」、「ヌース」から第三のものである「魂」が流出するとした。彼は「一者」から流出したこの二つのものを「直知されるもの」とし、「感覚されるもの」と区別した。「感覚されるもの」は「素材（質料）」が「魂」から形相を受け取ることにより、基本的な「物体」である元素（火・空気・水・土）になり、感覚界を構成する<sup>1)</sup>。感覚界におけるわれわれ人間も同様に、「魂」と「素材」が混じり合っているものではあるが、「素材」と混じり合っているのは「魂」の下位の部分だけであり、そこから上方（ヌースの方）へと伸びている部分こそが「真の人間」であるとプロティノスは述べている<sup>2)</sup>。

本論文ではその「魂」と「素材」に関わる箇所として、プロティノスの著作である『エネアデス』V 1「三つの原理的なものについて」で引用さ

れている、ヘラクレイトスの断片「死体は糞尿よりも投げ捨てられるべきものである」<sup>3)</sup>に注目する。人間であった「死体」と人間から出た「糞尿」はどちらも「物体」であり、価値的な差異がはっきりとあるようには思われない。しかし、この引用は明らかに「糞尿」を「死体」よりも上位に置いている。では、なぜプロティノスは「死体」を「糞尿」よりも下位のものと考えていたのか。この点をテキスト解釈によって明らかにする。具体的には『エネアデス』II 4「素材について」の6節以降を中心に扱い、魂の優位性を明らかにしたうえで、「死体」と「糞尿」に価値的な差異があることを示す。これを示すことによって、感覚できる世界においても階層があることを明らかにしたい。また、「死体」と「糞尿」を、「われわれの生きる感覚できる世界にあるもの」と「肉体ひいては物体全般の成り立ち」という二つの観点から分析することで、魂なき「死体」、つまりは形相を持たないはずの「死体」がわれわれに認識できてしまっている、という認識論的な問題についても解決を試みる。これらの観点から研究者たちを長年悩ませてきたプロティノスの素材論に関わる問題を解決する足掛かりになることを期待したい<sup>4)</sup>。

また、この断片は中期プラトニストであるプルタルコスも引用しているが、プルタルコスはプロティノスの考えとは違い、「死体」と「糞尿」を同列に置いているように思われる。したがって、第一章において、両者の思想の違いにも触れる。

## 第一章 プルタルコスとプロティノスにおける「死体」と「糞尿」

まず、プロティノスはヘラクレイトスの断片をどのような文脈で用いているのだろうか。

しかし、魂はそうではなく、つまり魂は魂の一つ一つの部分に細分化

され、魂の部分によって生命を与えるのでもなく、生きる者どもの全  
ては一体であるもの〔魂〕によって生きている。魂は、唯一性と普遍  
性に従って、創造の父に似ていて、全体の魂はいずれの場所におい  
ても現在している。また天も多であり、他の仕方でも他のものでありなが  
ら、この〔魂の〕力によって一つであり、この世界は魂の力故に神で  
ある。他方で太陽も魂があるという点で神であり、また、他の星々も  
同様である。またわれわれも、何らかの点でわれわれを神と言えるの  
ならば、このこと故に神である。すなわち「死体は糞尿よりも投げ捨  
てられるべきものである」<sup>5)</sup>。

魂は部分に細分化されて個別のものに生命を与えているのではなく、魂は  
一体のまま個物のものに生命を与えている。そして、この感覚界、または  
個物のものは魂があるという点で神であるとしている。すなわち、魂の価  
值的優位性をプロティノスはこの箇所ですべて述べているのである。引用文を  
「すなわち (εἰτεπ τῆ)」<sup>6)</sup>と結論の言い換えとして使っていることから、プ  
ロティノスはヘラクレイトスと同じように「死体」を「糞尿」より価値的  
に下位のものと考えていたことがわかる。しかし、この箇所だけでは「死  
体」と「糞尿」の価値的差異は見いだせない。

では「死体」と「糞尿」をプロティノスはこの章でどのように述べてい  
るのだろうか。

すなわち、一方で魂は全ての生き物たちを作った、…略…なぜなら、  
一方でこれらが生じるのも、滅びるのも、魂がそれらを捨て去るか、  
生命を供給するような場合であるから<sup>7)</sup>。

また、

魂以前は肉体は死体であり、大地と水であり、むしろ素材という暗黒であり、つまり非存在、つまりある人が言うには、「神々が嫌うもの」なのである<sup>8)</sup>。

この二か所から、プロティノスは死を魂が離れていることと考え、「死体」を魂が無いものと考えていたことがわかる。「糞尿」については、この章でプロティノスは直接的には何も語ってはいない。しかし、次のような記述がある。

付け加えられたものどもを除いて、浄められきった魂をつかんでよく見た場合は、同じ尊いものをあなたは見つけるだろう。それは魂であり、肉体的なものの全てより尊いものである。すなわち、万物は大地である。そして火だとしても、火を燃え立たせるものは何であろうか。またこれらの中から構成された限りのものどももそうだ。たとえこの構成されたものどもにあなたが水や空気を加えたとしても同じである<sup>9)</sup>。

ここでもまた、魂の価値的優位性をプロティノスは述べているのだが、この部分では魂の比較対象として「肉体的なもののすべて」が出てきている。これに「糞尿」が含まれていると考えてよいのではないか。つまり、プロティノスは引用文にある「糞尿」を物体一般と解釈したと考えられる。とすると、プロティノスにおける物体とは何か、という問題が生じてくる。これについては第二章で触れることにする。

また、プルタルコスには以下のような文脈でこのヘラクレイトスの断片を用いている。

「死体は糞尿よりも投げ捨てられるべきものである」とヘラクレイトスは言う。しかし、死体が全て肉であり、また、死体の部分が肉なのである。そして、魂が「肉体に」宿るように、塩の効果は肉体に旨味と風味を加えるのである<sup>10)</sup>。

「死体」を肉、魂を塩とみなし、塩の大切さを語っている部分だが、ここにプルタルコスが「死体」と「糞尿」の関係性をどのように考えていたのかを見ることができる。まず、引用とそれに続く文章は「しかし (δέ)」と対比で繋がっていること、そしてその「しかし」で繋がられている文章から、プルタルコスはヘラクレイトスとは異なり、「死体」と「糞尿」は同価値なものと考えていたと言える。「しかし」に続く文章において「死体」と同列に置かれている肉は、次の文章でいえば塩が加えられるところの肉、つまり肉体というよりは食料としての肉である。食料である肉は物体であり、「糞尿」も物体であるので、種別としては、「肉＝糞尿」であり、「死体＝肉」であるから「死体＝糞尿」であることは明白である。プルタルコスは物体には価値的な差異はなく、価値的な差異が生まれるのは魂や塩といったものがその物体に加わることによってであると考えていたと言える。

最後にプラトンが「死体」と「糞尿」をどのように考えていたかに少し触れる。プラトンは「糞尿」に関して、『パルメニデス』で「たとえば、毛髪、泥、排泄物や最も価値もなく、最もくだらない他の何か<sup>11)</sup>」にもイデアがあることを示唆している。「死体」に関しては『法律』で「死者たちのもろもろの肉体は死んだ者どものもろもろの影である<sup>12)</sup>」と述べている。しかし、「糞尿」・「死体」とともに記述が少なく、両者に価値的な差異があるかどうか判断がつかない。「糞尿」を石と同列に置くならば、『ゴル

ギアス』に「石 [たち] や死体 [たち] が最も幸福であるだろう」<sup>13)</sup> との記述があるが、発言者が対話相手であるカリクレスであることを考えるに、この箇所からプラトンが「糞尿」と「死体」を同列に考えていたと判断するのは早計であろう。「糞尿」との関わりでは語られているわけではないが、『パイドン』、『法律』といった著作からも「死体」が価値的に低いものであることは明らかである<sup>14)</sup>。

## 第二章 「死体」が「糞尿」より下位なものである理由

プロティノスが「死体」を「糞尿」より下位のものとおいた理由を考えるには、プロティノスが物体をどのように考えていたかをまず確認しなければならない。

さらにまた、実際に消滅もこれを明らかにしている。というのも、消滅は複合物に属しているのである。すなわち、もしそうであるなら、それぞれのものどもは素材と形相とからなるものなのである<sup>15)</sup>。

また、

形相が近づくのであれば、複合物は物体であるだろう<sup>16)</sup>。

これらの記述からプロティノスは物体を形相と素材の複合物と考えていることがわかる。それでは形相と素材とは何か。

形相とはプラトンにおけるアイデアであり、その物の原型である。しかし、ここで素材と混ざる形相とは形相そのものではなく、形相を持った魂である。魂は肉体の形相よりも上位の形相であるが、ヌースは魂よりも上位の形相であるとプロティノスは述べている<sup>17)</sup>。ここから、魂は形相自体で

あるヌースから形相を受け取るが、完全に形相を受け取ることはできないことがわかる。また、魂を通して、魂と混ざることによって、素材は形相を受け取るのだが、その形相は魂が持つ形相ではなく、より低次な形相なのだ。ここの低次な形相は素材自体が持つものではなく、ヌースから魂を通して降り注ぐ形相の光であり、また低次の魂である<sup>18)</sup>。従って、素材と混ざっている形相とは低次の魂とその魂を通して降り注ぐヌースの光である。

次に素材に関してみていく。プロティノスが素材について述べる時、そこには「直知されるもの」の素材と「感覚されるもの」の素材がある<sup>19)</sup>。プロティノスにおいて素材とは無質、無量、無形のものであり<sup>20)</sup>、また非有であり、すべてを欠いたものである<sup>21)</sup>。そしてまた、素材は他のものの基体(基盤)である<sup>22)</sup>。「感覚されるもの」の素材とはいえ、上記からもわかる通り、素材自体はわれわれには感覚されえない。推論によってとらえられるのである<sup>23)</sup>。

この素材と形相が混ざり合い元素になり、それらがまた混ざり合い感覚界にある物体となる<sup>24)</sup>。これらのことから、物体とは厳密に言えば、低次の魂と感性界における素材が混じったものとなる。では、これらのことから物体に「糞尿」が含まれるのだろうか。「糞尿」がわれわれの感覚でとらえられるものだからとはいえ、「糞尿」に魂がある、形相が含まれていると考えてよいのだろうか。プロティノスは以下のように述べる。

しかし、異なるものがしばしば(どちらも)美しいとすれば、形相は一つではないわけである。むしろ醜悪なものに対してのみ、素材に起因する事情で醜いということ容認すべきである。ただし、そこ(醜悪なもの)においても、完全な諸原理が隠されてはいるが、すっかり全部与えられているのである<sup>25)</sup>。

醜悪なものが醜悪さを持っているのは、醜悪のアイデアを素材と混ぜり合う魂が持っているからではなく、魂が素材に混ぜり合うというこの作用ゆえに、醜悪さが生じてしまうのだ。したがって、醜悪のアイデアというものの存在をプロティノスは認めておらず、醜悪や悪全般の原因を「素材と混ぜり合うこと」、または「素材そのもの」と主張するのだ<sup>26)</sup>。しかし、醜悪なものであっても、素材と形相が混ぜり合ったものであり、われわれから感覚されるものであるから、そこには「完全な諸原理」が簡単には見て取れないが、「全部与えられている」のである。

これらのことから、「糞尿」は物体に含まれると考えられる。では「死体」もまた物体であるのか。第一章でも引用した以下の箇所をもう一度見ていこう。

魂以前は肉体は死体であり、大地と水であり、むしろ素材という暗黒であり、つまり非存在、つまりある人が言うには、「神々が嫌うもの」なのである<sup>27)</sup>。

「死体」は「魂以前」であり、「素材だけの暗黒」である。つまり、「死体」には魂はなく、素材そのものであると述べられている。また、素材と魂という物体の構成からも「死体」が素材そのものであることがわかる。なぜなら、プロティノスは死を肉体から魂が離れていくことと考えているからだ。

上記のことから、プロティノスは「死体」を「糞尿」よりも価値的に下位のものとしたのである。すなわち、一方で感覚界の物体は、そもそも感覚界に属する素材と形相である魂から成り立っていて、「糞尿」はまぎれもなく物体であるから、「糞尿」には素材と魂が含まれている。他方でプ



ロティノスは死または滅びるということを複合物が要素に分解され、魂が肉体から乖離することであると考えた。従って、プロティノスにおける「死体」とは素材そのものとなる。これらのことから、素材と魂の混合物である「糞尿」よりも素材そのものだけである「死体」が価値的に下位のものであることになる。

### 第三章 問題点と解決策

前章で「死体」が「糞尿」よりも下位のものであることを述べてきた。しかし、「死体」を素材そのものとするには二つの問題が存在する。まず一つ目は、素材そのものはわれわれの感覚によって捉えられないということである。

感覚によってとらえられない判然としない素材が存在するはずなのである。実に目によってもとらえられず、実に無色なのである。耳によってもとらえられず、実に音ではないのである。風味でもなく、それゆえ鼻も舌もとらえないのである<sup>28)</sup>。

素材は物体ではないのだから。なぜなら、物体の触覚とは、厚いや薄い、柔いや固い、湿っているや乾いているといったものなのである。しかし、素材についてはそうした様々な触覚に属するものは何もないのである<sup>29)</sup>。

とあるように、われわれの感覚は物体を対象としている。なぜなら、われわれが感覚するものは魂において素材に与えられたものであり、素材が自身で持っているものではないからである。しかし、われわれは素材そのものである「死体」を感覚してしまっている。

二つ目は、「死体」が形と大きさを持っていることである。プロティノスにおける死とは先述した通り、魂が肉体から離れること、つまりは複合物が要素に分解されることであった。「死体」が魂無きものだとすれば、形相である魂が離れ、そばにいらなくなってしまえば、魂が来る以前の「素材という暗黒」になるはずである。しかし、われわれは他の人々や動物たちが死を迎えた後も、「死体」が残ることを知ってしまっている。

これら二つの問題を解決しない限り、「死体」を下位のものであるとすることはできない。この問題については2つの観点から答えることができる。

一方は、われわれの生きる感覚できる世界にあるものから推論する方法であり、もう一方は、肉体ひいては物体全般の成り立ちから推論する方法である。まずは前者からみていく。

だから、君の色の白さは性質ではなくて、働き、つまり白くする能力から発する働きである、と考えるべきだ。また、かの所（直知される領域）では、いわゆる性質はすべて働きである。それらは、ただわれわれの思いなしによって、ある性質とみなされているのだが、その理由は、それぞれの働きが（各実体の）特性であるので、実態を相互にいわば区別しており、また自己自身に独特の性格を付与しているからである<sup>30</sup>。

ある物体が「白」という性質を持っている場合、それは、「白さ」という性質そのものを持っているわけではなく、「白くする能力」がその物体に働きかけた結果、その物体は「白」という性質を持つことになるのだ。ヌースは自己自身に作用するため、ヌースの段階において、つまり、ヌース界においては、「白くなる能力」と「白くされるもの（＝「白さ」を持つ

もの)」は同じもの、つまりは、作用する主体と作用される対象が同一である。しかし、素材と混ざり合って生じる感覚される世界においては、「白くする能力」と「白くされるもの(=「白さ」を持つもの)、つまり、作用する主体と作用される対象は異なる。作用する主体が「魂(またはそれを通して素材に働きかけるヌース)」であり、作用される対象が「素材」である。そのため、同時かつ同所において常に働きかけられているヌース界では区別され得ない作用する主体と作用される対象の両者が<sup>31)</sup>、感覚できる世界においては、区別されてしまう。この区別は、魂の降下前(=素材そのもの)、降下後(=生命あるもの=人間)、上昇後(=死体)、という経過を生じさせることとなる。確かに、魂の有無という観点からすれば、「素材そのもの」と「死体」は同じであると言える。しかし、魂の影響を受ける前の状態と、魂の影響を受けた後の状態は同様であるということではできないだろう。というのも、われわれが、粘土を使って何かを作ったとして、作り終えた後に、自分が触る以前の状態に粘土を戻すことはできない。また、何も書かれていないところにわれわれが何かを書き入れたとして、その後、それを消したとしても、何も書かれていなかった時と全く同じ状態に戻すことはできない。これらと同じように、肉体もまた、死後に魂が離れていったとしても、魂の降下以前と全く同じ状態に戻すことはできず、魂が肉体の中にとらわれていた時の影響が残ってしまうのだ。魂の影響が残っているがゆえに、われわれは魂なき「死体」を感覚できるのであり、「死体」も形と大きさを持ったまま残るのである。

次に、後者の観点である。訳者である田之頭は以下のように注で述べている。

われわれ(この世に生を受けている)人間は、魂と肉体の合成体であるが、その魂が肉体にやってくる以前に、肉体はすでに或る意味では

「魂のあるもの」だったのである。すなわち、その肉体や肉は自然（ピュシス）の痕跡のごときもの（スペルマティコス・ロゴスもしくはエニユロス・ロゴス）によって肉として形成されていたのである。同様に植物も大地の塊がこれを管理する以前に、その痕跡のごときものによって形成されているのであれば、たとえまだ植物としての生命活動を営んではいなくても、それはすでに或る意味では「魂のあるもの」であることになる。この魂のあるものとしての植物を大地の魂の生殖・成長を司る力（ピュシス）が管理することによって、その植物は植物としての生命活動を営むことになるのである<sup>32)</sup>。

この田之頭の解釈をとるとするならば、これら二つの問題は解決することになる。すなわち、魂が来る以前に「自然（ピュシス）の痕跡のごときもの」によって素材は形作られているため、魂自体の降下が原因ではないから、魂が去った後でも「死体」は残るであろうし、われわれの感覚でも捉えられるであろう。しかし、もしそうであるならば、「死体」もやはり物体であることになり、「糞尿」との価値的差異がなくなってしまう。これに関しては、先に引用した、「そこ（醜悪なもの）においても、完全な諸原理が隠されてはいるが、すっかり全部与えられているのである」<sup>33)</sup> というこの箇所から、「醜悪なもの」である「糞尿」には、「自然（ピュシス）の痕跡のごときもの」だけでなく、魂も含まれていると考えることができる。すなわち、「糞尿」は何かしらの魂によって管理されているが、「死体」は魂による管理から外れ、生命活動が停止している。この点においても、「死体」は「糞尿」よりも価値的に低位のものなのであると言える。

## 結論

本論文では「死体は糞尿よりも投げ捨てられるべきものである」に注目し、プロティノスがなぜ「死体」を「糞尿」よりも下位のものとして置いていたのかを見てきた。

第一章では、同箇所を引用しているプルタルコスが「死体」と「糞尿」を同価値のものとして見なしているが、プロティノスは文法的に見ても明らかに「死体」を「糞尿」よりも下位のものとして見なしていたことを指摘した。VI内で、プロティノスは、魂の価値的優位性を主張したうえで、「死体」を魂の無いものとみなしていることから、物質一般に含まれる「糞尿」よりも「死体」が価値的に下位なものであるという仮定を導き出した。

第二章では、「物体」が「形相」と「素材」が混ざり合ったものであり、それゆえにわれわれに感覚され得るということを示したうえで、「醜悪なもの」である「糞尿」も他の物体と同じように、「形相」が与えられていて、「醜悪なもの」の「醜悪さ」は、「醜悪のイデア」のようなものがあるわけではなく、「素材と混ざり合う」という作用が原因であることを示した。他方で、「死体」は、魂が離れていってしまっているがゆえに、形相を持たず、「素材という暗黒」であり、「非存在」である。そのため、魂がなく形相を持たない「死体」は、魂を持ち形相を持っている「糞尿」よりも価値的に下位のものであるのだ。

第三章では、魂がなく形相も持たない「死体」がなぜわれわれの感覚できる形で残ってしまうのかという問題点に対し、2つの観点から解決を試みた。一つは、われわれが感覚できるものから推論する方法で、もう一方は、物質一般の成り立ちから推論する方法である。前者は、われわれの感覚する「形」や「色」といった性質が、「形付ける(または色づける)能力」が影響を与えた結果、生じるものであることを示した。その上で、感

覚できる世界においては、作用する主体（＝「形付ける（色づける）能力」）と作用される対象（＝「素材そのもの」）が区別されることによって、魂の降下前（＝素材そのもの）、降下後（＝生命あるもの＝人間）、上昇後（＝死体）、という経過を生じさせることとなってしまう、その結果、魂の降下前の「素材そのもの」と魂の上昇後である「死体」が完全なイコール関係にならないことを示した。後者は、肉体の死というものが、「肉は魂が来る以前に自然（ピュシス）の痕跡のごときものによって肉として形成されていたのである」という田之頭の注から、物体は「自然（ピュシス）の痕跡のごときもの」によって魂が来る以前に形作られているので、魂が去った後の「死体」もわれわれの感覚によってとらえることができるということを示した。また、「石 [たち] が一方で、大地に結びついている限りは大きくなり、他方で、大地から切り離されると妨げられ、[大きさが] 留まる」<sup>34)</sup> という記述から、無機物も魂によって管理され、生命活動を営んでいること、これらのことから、「死体」は魂による管理から外れ、生命活動を停止したもの、つまりは魂が来る以前のものと同様なものであり、「糞尿」は何らかの魂の管理下にあり、生命活動をしている物体である。この点において「死体」は「糞尿」よりも下位なものである、と述べることができる。

しかし、ここでまた新たな問いがふたつ生じてしまっている。「自然（ピュシス）の痕跡のごときもの」とは何かというものと、「糞尿」は何の魂によって管理されているかである。本論文ではこれらの問いに踏み込むことは出来ないが、前者の問いを考察することは、序論であげた「感性界の素材がどの段階で形付けられるのか」という問いの大きな足掛かりになるものであるだろう。その為、最後に少しばかりの見通しを述べておきたい。

「自然（ピュシス）の痕跡のごときもの」とは何か。田之頭は「肉体は

すでに或る意味では「魂のあるもの」だったのである」と述べている通り、「自然（ピュシス）の痕跡のごときもの」を魂であると考えていたことがわかる。素材を形付けるものは魂であるとするのはプロティノス研究において一般的な解釈であるし、前章で引用した箇所においてもプロティノス自身が言っていることである。しかしまたプロティノスは以下のようにも述べている。

あの世界のロゴスから〔素材へと〕出てくるものは、まさに生じようとするものの痕跡をすでに持っているのである。というのは、たとえば映像の現れの中でロゴスが動かされる場合、そのロゴスからの動が分離だからであり、また、もしそのロゴスが1つの同じものであるならば、それは動かされず留まっているのである<sup>35)</sup>。

「あの世界」はヌース界を指すので「あの世界のロゴス」は魂となる。その魂「から出てくるもの」は「生じようとするものの痕跡をすでに持っている」とはどういうことか。「ロゴスが動かされる」とは魂が素材の方へ傾くことを指す。その魂の素材への傾き自体がここでは素材の「分離」であるとしているのである<sup>36)</sup>。素材の「分割」とは感覚界の素材が部分に分かれることを意味し、その「分離」こそが「生じようとするものの痕跡」なのである。すなわち、素材の「分離」がまさに「感性界の素材が形付けられる」段階であると考えられる。では、魂「から出てくるもの」とは何か。注には「ピュシス」<sup>37)</sup>とされており、また先述の田之頭の注釈にも「自然（ピュシス）の痕跡のごときもの」とあるので、魂「から出てくるもの」は自然（ピュシス）であると考えてよいだろう。これらのことから「自然（ピュシス）の痕跡ごときもの」とは「魂の素材への傾き」であると言えるのではないか。そうであるならば、「自然（ピュシス）の痕跡

のごときもの」を魂とするべきではないと思われる。なぜなら、この「傾き」は「痕跡のごときもの」であるので自然（ピュシス）自身ではなく、また魂の動きであるから魂自身でもないと考えられうるからである。また自然（ピュシス）を魂とは区別する解釈もあり<sup>38)</sup>、その解釈をとるならば一層「自然（ピュシス）の痕跡ごときもの」と魂を同一に考えるべきではないし、「素材が形付けられる」原因を魂に求めなくてもよいので、魂が離れた後の「死体」がわれわれの感覚で捉えられる根拠となるのである<sup>39)</sup>。

## 注

- 1) V9 [5] 3, 28.
- 2) I1 [37] 7, 2.
- 3) DK 22B96.
- 4) cf. O'Brien (1991) and Corrigan (1981).
- 5) V1 [10] 2, 38-43.
- 6) Ibid., 2, 43.
- 7) Ibid., 2, 8.
- 8) Ibid., 2, 25.
- 9) Ibid., 2, 45-49.
- 10) *Comp.*, 669A.
- 11) *Prm.*, 130C.
- 12) *Leges.*, 959B.
- 13) *Grg.*, 492E.
- 14) *Phdr.*, 67A and *Leges.*, 959A.
- 15) II4 [12] 6, 9-10.
- 16) Ibid., 2, 13.
- 17) VI7 [38] 28, 21-23.
- 18) IV5 [29] 7, 38-61 and V9 [5] 3, 35-37.
- 19) 本論文で問題となっているのは物体にかかわる素材なので、直知されるものの素材については触れずに、感覚されるものの素材についてのみ触れる



こととする。

- 20) 「素材」という語を哲学用語として最初に用いたのはアリストテレスだと一般的には考えられている。プロティノスはプラトン『ティマイオス』における「生成の受容者」(受け皿)または「場」をアリストテレスの言う「第一質量」に相当するものと解釈した。cf. II4 [12] 1, 1-3. and Long (2016), pp. 40-45.
- 21) I6 [1] 2, 17 and II4 [12] passim.
- 22) II4 [12] 12, 23, II4 [12] 13, 24 and III6 [26] 10, 1-19.
- 23) II4 [12] 12, 34.
- 24) V9 [5] 3, 15-20 and 25-35.
- 25) V7 [18] 2, 14-17.
- 26) 悪の原因を素材そのものとする構造は、プロティノス自身が述べていることであるが(18『悪について』)、素材そのものを悪のアイデアと言えしまうのではないかという疑問が残る。これについては、Rist (1961) や O'Brien (1991) を参照されたい。
- 27) V1 [10] 2, 24-27.
- 28) II4 [12] 12, 27-30.
- 29) Ibid., 12, 31-32.
- 30) II6 [17] 3, 1-6.
- 31) ヌース界には感覚できる世界とは違い、空間・時間という概念が存在しない。そのため、厳密に言えば、「同時かつ同所において」ということはできない。
- 32) 『プロティノス全集』第三巻、181頁、注4。
- 33) V7 [18] 2, 14-17.
- 34) IV4 [28] 27, 8.
- 35) III6 [26] 18, 32-35.
- 36) cf. 『プロティノス全集』第二巻、365頁、注3。
- 37) 同、注1。
- 38) 金井(1990)、24頁。
- 39) しかし現時点においてこの考えは多くの問題を含んでいる。若干の例を挙げるのであれば、「魂の素材への傾き」とはどのような状態を指すのかといった問題や「自然(ピュシス)」とは何かといった問題である。従って、今後は「魂」と「自然(ピュシス)」に焦点をあて、「感性界の素材がどの段階で形付けられるのか」という問いを探っていききたい。

## 参考文献

テキスト

- Bernardakis, G. N. (1892). *Plutarchi Moralia* (7 vols). Teubner.  
Burnet, J. (ed.) (1899–1906). *Platonis Opera* (5 vols). Oxford University Press.  
Diels, H., & Kranz, W. (1951–1952). *Die Fragmente der Vorsokratiker* (3 Bde). Weidmann, 6. Aufl.  
Henry, P., & Schwyzer, H. R. (1951–1973). *Plotini Opera* (editio maior). Bruxelles et Leiden.  
Henry, P., & Schwyzer, H. R. (1964–1982). *Plotini Opera* (editio minor). Clarendon Press.

## 翻訳

- Armstrong, A. H. (1966–1988). *Plotinus. with an English translation*. Harvard University Press.  
Gerson, L. P. (2017). *Plotinus The Enneads*. Cambridge University Press.  
内山勝利編 (1996–1988)、『ソクラテス以前哲学者断片集』全5巻+別巻、岩波書店。  
田中美知太郎、藤沢令夫編 (1974–1978)、『プラトン全集』全15巻+別巻、岩波書店。  
田中美知太郎監修 (1986–1988)、『プロティノス全集』田中美知太郎、水地宗明、田之頭安彦訳、全4巻+別巻、中央公論社。  
ブルタルコス (1987)『食卓歓談集』柳沼重剛訳、岩波文庫、岩波書店。

## 参考文献

- Long, A. A. (2016). “What is the Matter with Matter, According to Plotinus?”. *Royal Institute of Philosophy Supplements*, 78. Cambridge University Press. 37–54.  
O’Brien, D. (1996). “Plotinus on matter and evil”. *The Cambridge Companion to Plotinus*. Cambridge University Press. 171–195.  
—— (1991). *Plotinus on the origin of matter: An exercise in the interpretation of the Enneads*. Bibliopolis.  
Emilsson, E. K. (2017). *Plotinus*. Routledge.

- Rist, J. (1961). "Plotinus on Matter and Evil". *Phronesis*, 6-1. Brill. 154-166.
- Corrigan, K. (1986). "Is there more than one Generation of Matter in the Ennead?". *Phronesis*, 31-2. Brill. 167-181.
- Kalligas, P. (2014). *The Enneades of Plotinus: A Commentary* 1. Princeton University Press.
- Menn, S. (2001). "Plotinus on the Identity of Knowledge with its Object". *Apeiron*, 34-3. De Gruyter. 233-246.
- 金井多津子 (1990)、「プロティノスにおける「魂の降下」について」、『哲学・思想論業』、8、筑波大学、21-31。

※著作表記などの略号については慣例に従い、LSJ (H. G. Liddell, R. Scott et H. S. Jones, *A Greek-English Lexicon*, Clarendon Press, first edition, 1843, ninth edition with a revised supplement, 1996.) のものを用いた。

“Corpse” and “Excrement” in Plotinus

HONDA, Keiki

In this paper, I focus on the Heraclitus fragment “a corpse should be dumped rather than excrement,” which is cited in V1 of “on three principles” of Plotinus’ *Eneades*. The “corpse” and the “excrement,” which came out of humans, are both “objects.” So, it seems that there is no clear difference in value between the “corpse” and the “excrement.” However, this quotation clearly rates “excrement” better than “corpse.” So why does Plotinus consider “corpse” to be inferior to “excrement”? To answer this question, I specifically focus on section 6 and beyond of *Eneades* II 4, which is named “About Materials.” Then, I explain which point delineates differences between “corpse” and “excrement.” I think this explanation solves the complexity related to the material theory of Plotinus.

(哲学専攻 博士後期課程 2年)